

『ギャンブル依存症について』 植苗病院 院長 芦沢健

木曾先生は光担当で私は影担当ということなんでしょうか。ただ私はあくまでも精神科医師ですし意見を述べるというよりも中立の立場でギャンブル依存の事実をきちっと述べるというのが役割だと思っております。ギャンブル依存症について、これだけまとまった意見が聞けるというのはあまりありません。だから結構自分ではいいと思っています。

ではギャンブル依存というのは一体何なのかということから始めます。国立久里浜病院の樋口先生が4000人クラスの一般人を対象に、調べたところ推計値で日本のギャンブル依存の人数は559万(4.8%)ととんでもない数字が出てきました。アメリカ1.5%、香港1.8%と比べて著しく高いんですね。ギャンブルの問題も経済的な問題に直結していて、このため借金とか、ネグレクトと言われる養育をきちっとしないような虐待ですね、離婚、横領、窃盗、自殺、さまざまな問題に直結するといわれています。そういったことについても話そうと思うんですけども、自殺未遂のあるギャンブル依存は臨床的に非常に多いと実感としてはあるんですが世界的に自殺とギャンブル依存が関連する調査報告は非常に少ないです。香港などで少し調査が行われたりしてるんですけど、事故死なのか自殺なのかわからなかったりとか、非常に難しい問題であります。別の病気が原因だなんて言われたりすることもありますんでね。北海道のGA(ギャンブラーズアノニマス)匿名でギャンブルを止めていく会があるんですけども、そのギャンブル依存の有志を対象に調査をして、その自殺リスクと自殺予防の効果についても調べたので報告します。それからトータルでカジノの誘致についてこれはどうなんだろうかということの問題提起していきたいと思います。

ICD-10という診断基準があります。これはWHOの国際的な診断基準ですね。それについてどういう人たちがギャンブル依存かという記載がありますので紹介します。頻回で反復する賭博のエピソードから成り立っている。自分の仕事を危機に陥れ多額の負債を負い、嘘をついたり、法律を犯して金を得たり、あるいは負債の支払いを避けたりすることがある。患者たちは賭博をしたいという強い衝動を抑えることが困難であり、それとともに賭博行為やそれをとりまく状況の観念やイメージが頭から離れなくなると述べる。これらの没頭や衝動は生活にストレスが多くなるとしばしば増強する。ギャンブルをしていてストレスが加わると余計ギャンブルをしたくなるという、借金すればまた追いつめられて借金返すためにまたギャンブルをやるという悪循環があるわけですね。ギャンブルで追いつめられて余計ギャンブルにはまる悪循環ですね。ギャンブルの無限地獄ですね。逃れられません。ですからこれは意思の問題というよりもやっぱり病気と考えていく必要があると思います。

ギャンブルの起源というのは相当古くからあります。ローマの有名な暴君ネロという皇帝がいましたけれども、この人もサイコロを使ったギャンブルに随分大金をかけ続けたという記載もあるようです。それからインドでも叙事詩にマハーバーラタという王子様がサイコロを使ったギャンブルで財産や領土を失い自分自身と妻を賭けるような、そういう王子様がでてくるのは昔からいるんです。そうすると、多分サイコロの起源がギャンブルの起源に近いのかなと思いますと、サイコロの起源はインド、エジプト、中国、モンゴル、ギリシャ、ローマも起源前からもありとあらゆるところから見つかっています。最初は信者や占いという形で使われたんですけども明確なギャンブルが誕生したといえないまでも物品や貨幣の流通とともにサイコロがギャンブルを介在して、まあお金が誕生してないので、モノを賭けて「こっちでたら」あなたのもの、「あっちでたら」私のものみたいなことがだんだん始まっていったんだと思います。だから人類はギャンブルして、その問題に直面してきたということがいえるかと思います。

さらに日本のギャンブル、日本書記になんとあるんですね、持統天皇の時代、「禁断双六」ものすごい双六というわけではないですよ。双六禁止です。そういう御触れができました。賭博性のあった双六を禁止しましょうという、双六が結構昔は賭博になっていたようです。それから江戸時代は富くじです。今の宝くじのようなものですね。これは一般の業者が販売する宝くじ。これを買っているいろいろお金が当たるというちょっとねずみ講的ですよ。皆さんからお金を募って誰々にみんな渡すという形だと思うんですけど、以降江戸幕府もたびたび禁止にし

たんですね働かなくなる者、借金で破たんする者が多数でたんですね、富くじ禁止になったんです。ただし、幕府公認の寺社の普請費用ですね、建て替えだなんだかんだというときには富くじをO.K.にしてたんです。水野忠邦が天保の改革で一切こんなものは禁止だというまで、結構富くじはありました。今も復興宝くじとかいろいろ自治体でやってますね。これも実はギャンブルなんです。

そして賭博という言葉は、法律では犯罪という意味なんです。犯罪用語なんです。賭博をしたもの50万円以下の罰金ですね。ですから公務員の方でギャンブル依存症で来たときに病的賭博と診断するとちょっとまずいんですよ。犯罪者みたいになっちゃうから。そうしてギャンブル依存症という名前を使っていくようになった経緯が実はあるんです。射幸心ってよく言われるんですね、偶然の利益や幸運を望む気持ちを煽るので法律で禁ずるといことなんです、50万以下の罰金があったり、あるいは常習賭博だともっと重たくなるんですね。100万円になってたりいろいろ書いてありますね。富くじですからね、3年以下の懲役になったりですとかそういう規則が日本ではあります。

実は快楽中枢というのが見つかってるんですね。中脳被蓋野っていう場所があるんですがここが中継点で前頭連合野にいくA10神経というのがありますが、ここを刺激するととても気持ちがいいんです。快楽が得られるわけですね。もともと動物だったら、性行動とか食べ物をとるときはやっぱりその行動を強化していかないと死んでしまう、子孫が減んでしまうのでそこに一番かかわるような神経系だと思うんですけど、この快楽中枢というのがわかってきましたので、ねずみに電極をつけて、食べ物とか、水、寝るところを置いといても、電極つけてレバーを押せば電気が入って気持ちがいいんですね、そうすると死ぬまでレバーを押し続けます。なんだかパチンコ屋にいそうですね。まあそのぐらい意思を超えてるんですね。食べるとか寝るとかそういうことを超えてずっとレバー押しをしてしまうという。多分ギャンブル依存の人たちはこれに近い状態だと思います。悪循環でさらにその快楽中枢を短絡的に強化していくような形のことがあるんだと思います。これは別にギャンブルだけではなく、ほかの薬物依存だとか性の依存、いろいろなことに関して関連しているという風にいわれています。薬物依存もこうですね。

アディクションと呼ばれています、こういったA10神経を刺激することがあるんですけども嗜癖と訳します。物質、薬物、アルコールに対する依存。ギャンブル、買い物、借金、性行動、ストーカーだったり、摂食障害、食べ吐きですね。クレプトマニアなんて言われてますけど窃盗、万引きなんかも本当は止めたいの止められなくなっちゃったり、ちょっと他のひとよりも得をしたいというところでやってしまう人たちがいたりとか、アトピー性皮膚炎の成人でなった人で、あまり痒くないんだけどひとしきり自分をかきむしらないと気持ちが落ち着かないというのちょっと依存症的な要素があるんじゃないかと。それから今話題のインターネットですね、それから依存症の夫や妻に依存するというんですかね、それを援助するというのを依存しちゃう人たちがいるんですね。お酒でどうしようもない夫でどうにもなんない夫とやっとな離婚したのにまた同じような人と一緒になっちゃうみたいな、どういうわけかわからないけどそういう人を援助することに生きがいを感じちゃうというような、供依存というんです。それから虐待だとか、恋愛、いつも恋多き人というのはいますよね、こういった物質への依存プロセスへの依存、人間関係の依存こういうアディクションの依存というのは多分すべてさっきのA10神経を刺激していると言えると考えられています。こういった依存症というのは、まあアルコール依存症の治療がおおもとになってさまざまなアディクションの問題に応用されると。ただ医学的見地からは曖昧さが残るようなものもあります。アトピーは依存症と取るべきかとか、恋愛って普通の人もしてますけどどうなんでしょうとか、ちょっと曖昧さがありますね。ただそういう傾向なるもの、A10神経を刺激するということはどうも全部あると思います。

歴史的にギャンブル依存は意思薄弱者だとか未熟者、身勝手な行動、賭博の法律に反する犯罪者としてみなされてきたわけですけど、1972年にオハイオ州ではじめてギャンブル依存の入院治療が行われまして、1977年にWHOによって疾患概念のひとつとして認められて、アメリカのDSMという診断基準でも精神疾患の基準で衝動制御障害の一つであるというふうにいわれるようになりました。1970年代以降をギャンブル依存を精神疾患として認識する動きが広がっていて今につながってるんですけども、一方で患者の自助グループのG.A.って1957年からすでにそのころからアルコール依存の人って結構ギャンブル依存も持ってる人が多いんで

すね。ちょっと言い方は悪いですけど、飲む、打つ、買うって人類が人類を滅ぼしそうな危ないものなんです。お酒とかギャンブルとか、異性関係だとか非常に難しいですね。酒飲んで暴れて三面記事とか、ギャンブルで横領して三面記事とか、男女関係のもつれで三面記事とか、みんな三面記事の出来事が多いんですけども、でも、どの人でもそういったリスクを持っている世界でもあるわけです。なんでこんな立派な人がこんなことをみたいなことが結構三面記事にはありますけれども。そういうことでアルコール依存の人は、実はギャンブルも一緒に持っていることが多くて1957年に自助グループができてました。非常に先んじる思いで15年も前に治療的なことが実は行われていました。

ちなみに北海道にも札幌・北見・苫小牧・釧路・小樽などにGAがある。ギャンブル依存では先進地域ですね。きちっとしたGAがされています。

DSM-5というもっと新しい診断基準ができましたけれども、DSM-IV-TRというのがあるんですけども5項目以上ある場合は病的賭博と診断される。まあギャンブル依存症と言った方がいいと思うんですが、

- ・いつもギャンブルのことばかり考える。
- ・興奮を求めギャンブルに使うお金は次第に増える。だんだん生活圧迫していきますよね。
- ・ギャンブルを止めようとしてもやめられない。
- ・ギャンブルを中断するといらいらす。
- ・不快な気分や問題から逃れるためギャンブルをする。
- ・負けを取り戻そうとギャンブルする。
- ・ギャンブルをしてないと嘘をつく。
- ・ギャンブル資金を得るために詐欺、盗み、横領などをする。
- ・ギャンブルのために仕事ができず信頼を失う。
- ・ギャンブルの肩代わりをしてもらう。

平たくいうと借金してまでギャンブルしている人はギャンブル依存ととった方がいいと思います。車を買うときと家を買うときはローンを組んでもいいと思うけどあとは止めた方がいいといっていますね。ギャンブルでローンなんか組んじゃったらエライことですね。それから職場でちょっと借りたのが借りたことにならないで横領になることが多いですね。10万とか100万とか200万くらいで人生棒にふるのは馬鹿馬鹿しいですよ。

だけどギャンブルの人たちは借りたつもりですよ。盗ったつもりないですよ。いずれまた返せばいいと思っている。借りたんだけど、返せなくなっちゃう。それで横領で逮捕されちゃうっていうことが結構ありますね。結構職場でも優しい職場は補填してくれたらいいよってことで親が補填したら何事もなかったかのようになって逮捕されない場合もあります。けどあまり何度もあると職場もいい加減頭にきて逮捕になっちゃうって辞めてもらう形をとることも決してめずらしくはないです。ほんのちょっとのお金でどうも仕事やめてる人たちはギャンブル依存です。借金の肩代わりは多分しない方がいいです。どんどんどんどん増えます、その借金は

それからDSM-5ですすね、病的賭博だとパソロジカル・ギャンブリングという名前だったんですけどもギャンブル障害という名前に翻訳されていますので、これからこの言葉が使われるようになるかもしれません。さらにDSM-5の最大のところにアルコール依存、薬物依存と同列で扱われる依存症の一つであるというそういう扱われ方です。A10神経を刺激する物質とプロセスの依存でちょっと違いますけれども同じ依存症であるという扱いを初めて受けたということですね。

ICDによるパソロジカル・ギャンブリングは、さっきの診断基準の続きなんですけども持続的に繰り返される賭博。貧困になる。家族関係が損なわれる。そして個人的生活が崩壊するなどの不利な破壊的結果を招くにも関わらず持続しつづけて増強するということですね。賭博っていう翻訳になってしまったんですね。賭博は法律上禁じられており、犯罪行為になるため一般的には病的賭博は用いられてなくてギャンブル依存症という言われ方をしている、実際に専門家もギャンブル依存症という用語を使っているのが現状です。慣例上これを使うのが一番わかりやすいし、賭博という言葉は犯罪の言葉なのでこれはちょっと使いにくいということでギャンブル依存症になっています。

原則アルコール依存症と同様の治療です。心理教育、集団療法、個人療法、それからそれだけでは駄目です。

債務整理、自己破産、住居の確保、生活保持のソーシャルワーキングです。ある患者さんで自殺を繰り返してどうしようもない人が来たんです。よくよく聞いたらパチンコで借金重ねて身動きがとれなくなっちゃった、それで死にたかった。抗鬱剤を飲んだって借金無くなりませんから。もっと元気になってパチンコをやれるというわけでもありませんしね。やっぱり追いつめられちゃってギャンブル依存症としてきちっと治療していくということで債務整理をするとか、GAにつなげるということで、自殺をしないで今GAのメンバーできちっとやってる方がいます。それからホームレスギャンブラーという方もいましたね。給料全部パチンコ、パチスロに入れちゃうもんだから家賃払えなくて追い出され友達の家を転々とするという。またなんとか貯金して家を借りようとするんだけど、また貯まったお金に手を出して駄目になるということを繰り返して、まさにさすらいのギャンブラーみたいな状態でその人もなんとか一時的に生活保護をもらって治療を受けてアパートに入り働いて普通にGAメンバーでやってる人もいます。ですからただ単に病院にいて治療すればいいということではなくて社会的なソーシャルワーキングが必要とする疾患であるということです。回復のために自助グループの紹介が必要で、場合によっては北海道ではマック、サマリヤや横浜にあるワンデーポートという施設があります。ワンデーポートをやっている人は元中学校の理科の先生で、その方も職場に闇金の請求書がやってくるっていうくらいで、最後はポーカー賭博まで手を出していたというひとです。そういう人がGAで立ち直って、自分もギャンブルで苦しい人生を送っている人たちの援助をする仕事をしたいということでそういうNPO法人を立ち上げて共同作業所でギャンブル依存者を引き受けているという施設があります。

ギャンブルを治療する上で一番大事なことはギャンブル止めるより先にやる大事なことは正直になるということです。これはあらゆる他の依存症に共通していえることです。嘘つきになりますからね、皆さんね。だからギャンブルを止めている振りの練習なのか、ギャンブルを止めるのかどっちかわからなくなるんですね。やってないよと言って本当はやっていたら止める振りの練習ですからね。ですから正直に話すことを評価します。だから厳しく指導したり、怒りをぶつけるようなそういう指導はしませんよ。そしたら嫌ですもん、怒られるの。誰だって嘘をつきます、やってませんって。だからそうじゃなくてギャンブル実はやりましたって言ったら、ああよく言えたねっていうほうが、なんかギャンブルやって先生に褒められちゃったって、いや、ギャンブルやったことを褒めたんじゃないよ正直に言ったことを褒めたんだよっていうそこですね、正直に言えることが回復の第一歩です。借金がどれだけあるとか、借金がないとか、みんな嘘をつくんですよ。で、ひどい状況になると自殺したくなったり、お金を横領してしまったり、蒸発してしまったりだとかいろいろあるわけですから、まず正直になることが回復の第一歩です。

のんびり、ゆっくり、じっくり、「安心した治療環境」・「長期にわたる回復過程」・「確実に為すべきことを為す」この三つが必要ですね。患者の回復の焦りという人が多いですが目先のことに忙殺されずどっしり構えてやっていく必要があります。患者の依存症の受容の手伝いをし、ギャンブルを止めていく生活を応援し、社会生活を送れるようにサポートしていく非常に長い時間そういう治療関係となりますので関係が緊密になりやすい面もあります。そういう関わりでやっていけたらいいのかなと思います。

AAというアルコール依存症の自助グループがこれから派生してNAという薬物依存、GAというギャンブル依存症のグループが出来てきているわけですが、まあいろんなのがあります。そしてこういうグループが実はすごく大事ですね。自ら立ち直ろうという人たちのグループですね。治療をやってもらおうといううちは無理ですね。自ら立ち直ろう、今のこのギャンブルの地獄のような悪循環から変わっていかうそういうグループに所属してそれを私がサポートするようなそんな形の仕事をしています。北海道のGAにどれだけみんな死にたいと思っているかわかってないんでね、ある意味ハードなギャンブラーの人たちですね。

そういった人たちについて調査をしました。A4一枚で同居家族はいるか、仕事、精神科受診、ギャンブル止めている期間、GA参加期間、主たるギャンブル、他のギャンブル、依存症はありますか、親の依存症はありますか、自殺に関連すること、こういったことをだいたい大まかに聞きました。そうするとやっぱり男が多いですね、男女比3:1。47歳前後でしょうか、そういう人たちです。23歳~73歳までいました。家族の同居は半分。意外とギャンブルは家族持ちが多いです。有職者も6割近く。精神科受診が意外に少なく4割いってない。自分でGA探して行ってきてそこでよくなっている人結構います。病院かかるとお金がかかりますから。しかも必

要のない薬飲まされて金までとられてパチンコ代減らされるということがありうるわけで、まあ本当に止めなければ精神科のギャンブルを見る先生、依存症を見る先生がいいと思います。でもギャンブル診る先生が中々いないということがあると思います。あるいは多少看てもかなり専門性もって話できるまでの先生はいないかもしれない。ギャンブル止めた期間はいろいろありますけれども半年から5年未満の人たちが多く、そういったグループですね。参加期間もまあ同じくらいですね。5年以上の人もありますけどスリップしてるということですね。でもGAに行くってことは結構いいですよ。

借金までいかないことも多いです。それから主たるギャンブルはパチスロが多いですね。

次にパチンコ。他のギャンブル、一番パチスロ、次パチンコで合わせて94.1%。この二つなんですよほとんど日本のギャンブルは。競馬、競輪、競艇など昔いろいろありましたね、賭け麻雀、野球賭博。でもそういうのはほんの一部で日本のギャンブル依存の問題はなんですか、といったらパチンコとパチスロっていいいくらいです。私は、多分パチスロとカジノにあるスロットはどれだけ違うのか良く分からないんですが結構近いものなのかなとも思うんですけどね。まあ日本ではパチンコ、パチスロが非常に大きいですね。他の依存症はあるか、やはりアルコール依存症がありますね。親が依存症であると、アルコールとかギャンブルの依存症になることが多いです。遺伝するんですギャンブル依存は。

それを統計的に調べたということで、他の依存症を持つことと親に依存症があることということとは0.0366の有意水準で関係がある。親が依存症だと、ギャンブル以外にもアルコールとか薬物などそういったいくつか依存症を持っているということです。親の依存症の問題を持つということはそういうことですね。親がアルコール、ギャンブルの依存症を持つ場合、子供もアルコール、ギャンブルの依存症を持つ可能性のことを統計的に示したということですね。まあ家族の文化ということもありますね。身近にありすぎてやってしまうという。それからA10神経を刺激する刺激の仕方が非常に心地よくなりやすい。そういう体質を遺伝している可能性があります。この遺伝子を持つとギャンブラーになるということではありません。癌になりやすい家系ですねとか、高血圧になりやすい家系ですねとか、そのぐらいにとっておいてください。絶対になるというものでもないです。うちの親がギャンブラーなんですけど、私は大丈夫でしょうかとか、まあやらなきゃ大丈夫ですね。ただA10神経の刺激の仕方は非常にギャンブルのような形で刺激されやすいとか、人によって違います。恋愛で非常に刺激されやすいとか、あるいは芸術がよかったり、音楽がよかったり、運動がよかったりA10神経はいろいろなもので刺激されて、人間が気持ちいいと思うものはすべてA10神経です。数学の難しい問題を解いてああそうかと思うのもA10神経です。ですから人間の行動原理はみんなA10神経なんですよね。たまたまギャンブルにはまりやすいということで、意思が弱いということでは決してありません。

自殺したい、計画を含めると8割近い人たちがGAに参加する前は自殺したい、自殺企図した人は6割いるんです。実際手首切ったり。GA参加後は15%あるいは自殺企図は6%で、札幌市民を調べるとだいたい20.4%死にたい、自殺企図3.8%とだいぶ近い数字ですね。だからギャンブルにのめりこんでいる最中は死にたい人ですよ。8割近くが死にたい、6割近くが自殺企図してる、実際自殺を実行している。生き残ってますけどね。それがまあGAに参加して非常に変わるということです。GA参加前は、念慮、企図ともに極めて高かった、ギャンブル依存、自殺について非常にハイリスクな疾患であるということがわかります。ただGA参加後は、ほぼ札幌市民と同等であると言えるかと思います。これ実際に数字0.0001未満の有意数字、こんなにすごい自殺予防する抗うつ剤は実はないですね。抗うつ剤より圧倒的に効きますね。GA行くってことはね。GA参加前は自殺企図、自殺計画、自殺念慮、準自殺念慮、無の順だったのに対し、GA参加後は、圧倒的に自殺リスクゼロになっているわけです。

まとめです。北海道のGA有志対象に自殺リスクの実態調査を行いました。ギャンブル依存の9割近くはパチスロ、パチンコの問題です。親がアルコールやギャンブルの問題を持つ場合、子どもにもアルコールやギャンブルの問題を持つ可能性があることを統計的に示しました。ギャンブル依存は自殺のハイリスクグループであることがわかりました。しかしGA参加後は0.0001未満の有意水準で自殺リスクを減少させ、札幌市民と同程度となることが確認されました。GAは専門家との相補的な関係を維持しつつ、治療的にも自殺予防からももっと活用されるべきだと考えられました。

ギャンブル依存の家族の人はどうするべきか。本人はギャンブルするか、しないか悩む。家族は本人がギャンブルしてるかどうか、またパチンコしてるんじゃないのとか、借金してるかとか心が休まりません。「依存症の家族」という名前の病気です。本人のことばかり、自分のこと考えてない、本人がどうなっているかどうかその心配ばかりです。ギャマノンというギャンブラーの家族の会があります。そこに行くのも一つの方法ですね。イネーブラーといってさっきの供依存の人たちですね。ギャンブルを可能にするようなことをします。借金の肩代わりをするだとか、自分の夫がギャンブラーで実家に頼みに行くだとかギャンブルさえやめれば本当にいい人か？離婚？同居？子供の養育、経済的理由は、離婚しない理由になりうるのか？一緒に稼いでくれるかだとか、自分の人生は自分が主人公ですから私は離婚してもいいと思います、場合によっては、自分自身のために生きましょう。借金の肩代わりをしない。愛の力ではギャンブルは止まりません。治療が必要です。場合によっては離婚も選択肢。回復したら再婚してもいいと思います。

ギャンブル事業は本当に儲かるのか？世界中でカジノが誕生している。今日木曾先生がお話した中で極東アジア圏はIR市場の真空地帯だという話でしたけれども、まあ考える必要はあると思うんですね。世界中でカジノが誕生している。新たにカジノ誘致は経済振興に果たしてなるだろうかということですね。

それでパチンコ屋さんの企業全体の倒産件数。パチンコ屋さん減ってるんですよ、倒産してね。パチンコ屋の倒産多いんですよ。だからパチンコ屋さんが減少してますよ。まあ大手だけになってるということですね。それだけ倒産して再編してると。で、パチンコ屋さんに行く人さっきも言ったとおり47歳前後ですからね、結構中高年が多いんですよ。若い人も行きますけどね、若い人の依存の問題は、最近はどうもネットのほうにシフトしそうな雰囲気がありますね。パチンコ屋には若い人はあんまり行かない。本当にカジノは儲かるんだろうか？そういう場所に行つてするようなギャンブルは段々オジサンと老人のやるものになってくのかな？という感じがちょっとします。それは分かりません。ブームがありますからね。古代から人類はギャンブル好きだったわけです。

日本のギャンブル依存は559万人。暫定世界一位のギャンブル大国だったわけです。ギャンブル依存という悲劇が生まれましたが全てのギャンブルを廃止すべきだろうか？そうすると宝くじもパチンコ屋もなくなる。本当にそれでいいのかなとも思いますよね。株式、外為、商品先物、投資活動なども非常にギャンブル性の高いものもありますよね。何が売れるか全ての経済活動にはもはやギャンブル性がつきものですね。貨幣経済が始まった時からもはやそれは始まっているんだと思うんですね。お酒もそうです。最初は神様のお神酒だったわけです。それが産業革命以降ものすごいお酒の量が増えて禁酒法をやろうというくらいアルコールの問題で困ったわけなんです。ですから非常によく似ているんです。ギャンブルとどう付き合うか、お酒とどう付き合うかに近いと思います。日本はパチンコ屋大繁盛のようでもあるが、実はパチンコ屋は倒産し、店舗数も減少している。カジノは本当に儲かるんだろうか？ちなみに最近の若者はネット依存にシフトしている傾向がある。流行り、廃りは世の恒でもあるわけですから大きな箱モノを作つてどうなるかということももしかしたらあるかもしれない。でもその起爆剤になるかもしれない。でもギャンブル依存もでるかもしれない。まあそういったところを考えるべきなんだと思います。どうもありがとうございました。